
真実 まこと

RALA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真実 まこと

【Nコード】

N0628D

【作者名】

R A L A

【あらすじ】

16歳・高校2年生の新垣宏乃^{にいがきひろの}は、8歳年上のイケメンサラリーマン小山歩^{こやまあゆむ}と、幼いころから憧れていた日々を暮らしていた。宏乃には忘れられない恋があった。脆く、悲しかったあの恋。過去の恋をちらつかせながら送る日々。最愛の人を想う一心で歩は決断する。

（前書き）

これは、小説家を目指す、RALAとしての処女作になります。
どうか、最後まで読んでいただけると嬉しいです。

あのことは数年経った今でも思い返す度に複雑な想いがよぎる。
皮肉にもハッキリ覚えている。

きっとこれからもこの傷は癒えないのだろう、私の罪は消えないのだと。

私には、忘れられない恋があります。

私は、にいがきひろの新垣宏乃。

男っぽい性格で、あまり女の子らしさは無い。

肌も生まれつきこんがりとした茶色だし、背は高いし、太り気味。
着やせするタイプだから何とか救われてる、今日この頃。

強いて言えば、地図がダメなところとか……、極度の恥ずかしがりなところ（？）とか。

ただ、一途なことが取り柄の私。

「ヒロっ！！」

私は彼の会社の前で待っていた。

制服を着たまま突っ立っていたので、警備員とすれ違う会社員に変な目で見られた。

こんな面倒くさいことは滅多にしないけど、今日は下心があるから特別な日。

「迎えに来てくれるなんて珍しいねっ！俺に早く会いたくなっただの？」

いつも冗談で笑わせてくれる明るい彼、こやまあゆむ小山歩。

彼は24歳の会社員で、私は16歳の高校1年生。なんと年の差8歳のカップルです。

「違うよ」。今日はね、歩の誕生日でしょ？」

「そつかあ……、氣遣ってくれたんだねっ！優しいなあ……お
じさんグツとくるよ！」

「外食しようッ 歩のオゴリ！」

「援助交際じゃないんだよ、ヒロ……。」

渋々だけど、彼は進み始めた。

彼は私と一緒にいるときは、仕事の愚痴をもらしたりしない。

ため息も、疲れた顔も一切見せない。私の前では若い自分でありたい、と思ってるのかもしれない。

「ねえ……、洋服買ったげるよ。制服じゃ、援助交際にしか見えないっしょ。」

「えゝ！！マジで？？歩優しいゝゝゝ！！」

見た目が年相応でない彼は、それをひどく気にしている。

年の差も、ひどく気にしている。私がもっと早く生まれていれば良かった、って最近よく思う。

結局、歩好みの“お姉系”の服を着せられていた。

私はもともと“ギャル服”が好きだけど、まあ買ってもらっておいてそれは言えない。

それに、今日は彼の誕生日なんだし……遠慮しとくか、なんて。
「綺麗だ。」

彼は夜景の見えるレストランでそう呟いた。

「何が？つつかドツチが？」

全く、色気の無い言葉だと思って発言してるけど、彼が“ヒロらしい”って言うてくれると分かってたから。

「ヒロらしい言葉だね」

そう、私は大人な恋に憧れていた。

同世代の子の恋愛といえば、手を繋いだり、キスしたりするのにいちいちドキキしてるようなイメージ。

だけど、私の理想はエスコートしてくれる素敵な紳士、こうやって

夜景の見えるレストラン。

歩と一緒に生活するときの全てが、幸せだとかみ締める瞬間。

私と歩は、いつもふたりで食事するときは大体、私の学校の話とか、歩の学生の頃の話をする。

私が学校で告白されたと言うと、内心妬きながらも「モテるんだね」って言う。

歩が昔、告白されたときのことを聞くと、内心妬きながらも「モテるんだね」って言う。

お互い、いわゆるボーカフェイスで。

「美味しかったね〜」

「歩、また連れてきてね〜」

「今度はヒロのオゴリでな〜」

会計を済ましているとき、ふと歩はコツチを向いた。

冗談抜きにカラッポな財布を私に見せ付けて、眉をゆがませた。

店を出ると、歩はすぐに大きく背伸びした。

「疲れるね〜、ああいうお店は。ん〜……………」

「そうっ？この高貴なワタクシにはお似合いだったけどね。あなたにはそうじゃなくても。」

「ははっ、何それ〜。どっちが年上だよ〜」

そう言うて歩は立ち止まった。もう私にはこれから何が起きるのか、分かっていたけど照れ隠しで、いつものボーカフェイス。

歩はそつと、キスをした。触れるだけの本当に優しいキス。

震えるくらい、ゾツとした。長いキスの後、唇を離れたときの切なそうな歩の表情が大好き。

本当に通じ合えてるって感じる、私の憧れたこの恋。

*

*

*

あんなロマンチックな夜の後なのに、歩は何もしてこなかった。
そのまま家に送り届けて、私を大事に大事にした。16歳には大人
すぎる恋だと。

こんなとき、ふと思い出す。

さとみけん
里見謙。

私の、すごくすごく大事な人。そして、儚く終わりを告げた恋を。
あんな気持ち悪い別れ方があるだろうか……、確かに彼は言った。
あの言葉がずっと私を悩ませ、苦しませている。
私が悪かったから……、謙には非は無いつて分かってるから余
計に辛かった。

いつまでも愛されてると思うなよ。

*

*

*

いつの間にか寝ていた。怖い夢を見た、
ひどい寝汗をかいていた。 悪夢。

“ 歩、助けて……！助けて……！！！”

何度も、そう叫んだ。降りしきる雨の中で、ぼやけていく視界。
リアルすぎて、吐きそう……。あの日の光景によく似ていた。

時刻はもう、朝の2時。

怖くて怖くて……誰かに助けてほしかった。

手に持っていた携帯の画面に映っていたのは、“ 小山歩”。

プルプル……

ガチャ。

「もしもし？ 広乃はもうっ……………何時だと思ってるんだよ」

「……………怖いよ、歩う……………」

「どうしたの？ 俺に話して？ きつと楽になれるから」

「怖い夢、見たの。もう、すっごく怖い夢だよっ！？」

「……………俺、そっち行こうか？ ひとりで怖いだろ？？」

きつと歩はそう言うってくれると思ってた。歩の優しさに甘えたかっただけなのかもしれない。

ただ、分かってるんだ。歩はウチには来ないこと。

「平気だよ……………、おやすみなさい。」

長い、長い一日だった。

*

*

*

次の日は休みの日だった、日曜日。

正直、どうやって過ごそうか迷ってた。

歩とまったり過ごすのもよし、友達と買物に行くのもよし、ひとりで過ごすのよし。

日曜日に歩の家に行くのは迷惑かな。仕事しているときに行くと私の前では絶対仕事はしたりしないから中断させてしまうもんね。

歩は、会社では“スーパー会社員”。任せられた自分の仕事はバリバリこなしていくし、きつと女性にもモテてるんだろうなあって……………。

くくく

「もしもし？」

「あ、俺だけど。元気してる?」
元気そうに話す向こう側に、パソコンのキーボードをたたく音がする。

やっぱり、仕事してるんだあ…………。

「ウチくる?暇だしさあ〜ここはひとつ…………」
歩が話していたとき、

「あ〜ゆ〜むう〜!!誰に掛けてんのー?」

奥から聞こえたので、小さな声だったけどあれは女性の声だった。
いつか会った歩の元カノ、加藤崎さん…………。

彼女との思い出は、…………罵られたことしか覚えていない。

初めて会った日は、“歩とは別れてない、あなたは遊ばれてるのよ”。

次に会ったときは、“私、デキちゃったの。あなたって本当馬鹿な人ね、可哀相。まだ若いのに”。

「おい…………、静かにしろって!!」

歩はできるだけ静かに言っただつもりだと思っけど、ハッキリ聞こえた。

「崎さん、いるんでしょ?いいよ、隠さなくても」
奇妙な間まができた。

「ごめんな…………、でも仕事の相談だから!!別に怪しいことは一切…………」

ブチッ ツーッ…………

電話は、切れた。

*

*

*

それから、頻繁に友達と遊ぶようになった。男友達もできたし、普通に遊んだ。

嫉妬しているのだと、分かっているけど止められない。

歩から何度も電話があったけど、出る気はしなかった。

何度電話を拒んでも、冷たい態度をとっても、歩は迎えに来てくれると信じてるから。

あれから、頻繁に謙のことを思い返すようになっていた。

謙と出会ったのは、大雨の日。

他校だった謙だけど、ここらへんの地区の中学では有名人だった。

“マジかつこいい人がいる！”

みんな口を揃えてそう言った。まだ、私が中学2年生・14歳だった頃。

「好きです！……！」

ダメもとで言ってみた私だけど、それは奇跡だった。

「俺も……お前が好き」

そのとき交わしたものが、私のファーストキスだった。

綺麗な思い出、のはずだった。

*

*

*

私たちはだんだん、離れられない仲になっていった。良い意味でも、悪い意味でも。

“倦怠期”というものが訪れた。別れたのは、出会った日と同じ、大雨の日だった。1年前。まだ1年しか経ってない。

別れた原因はお互いにあった。お互いを責めて、お互いの傷を舐め合った。

私は異様にモテる謙に激怒し、謙は付き合い始めた頃とは明らかに違う、私の態度に激怒した。

ふたりをつなぎとめる思い出は、少なかった。

もっと私が考えていれば、大人だったら良かったのに。大人になれてたら。

あんなに好きだった謙を失ってしまった。

やがて謙は、すぐに他の誰かと付き合い始めた。

それでも忘れ切れなかった私は、もう一度やり直そう、そう言った。

いつまでも愛されてると思うなよ。

それは、いつかで聞いた言葉だった。愕然として、しばらく動けなかった。

幼い頃に母は病死し、父は酒乱気味だった。

私はほとんど毎日のように頬を殴られ、腹を蹴られ大変な日々を送っていた。

でも、私はお父さんが大好きだった、お父さんが死んだ今でも大好き。

ただ、お父さんは私を恨んだ。恨まれてたんだよ、私は……。母さんに迷惑ばかりかけてた私のせいで、母さんは死んだんだと言い聞かされた。

父さんは直腸癌だった。最後に言った言葉は

“いつまでも愛されてると思うなよ”。

*

*

*

自分でも驚いた、まだこんなに好きだったなんて。

1週間が経ち、私は学校を休みがちになっていた。

週がはじまっただばかりの月曜日、正直、今日は登校しようかどうか、迷っていた。

ピンポーン

「はい……………」

歩は勢いよく私を抱き寄せた。

「会いたかった、ヒロ……………」

「何？」

私は冷たく言った。強引に体を離れた。

「最近学校に行っていないだろ？悪い子だな！オシオキだっつ」

歩はそう言っ、無理矢理家の中に入ってきた。

誰も居ない家、殺風景な家。

「へえ〜！ヒロはここで生活してるんだあ」

「幻滅した？」

少し笑ってみせた。歩は安心したように続けた。

「崎のこと、気にしてる？」

「うん」

「そんなハッキリ言われると言い難いなあ〜。でも、本当に仕事の話だったんだからねっ??」

分かってる、本当に仕事の話だったことくらいは。

ただ……………、

歩も謙も両方手に入れないと願っている、欲深い自分が許せない。

一度手に入れたものは、色褪せてしまうのに。

「……………気になる人、できたのか？」

心臓が高鳴った。まさに、その通りだったから。

いつものボーカーフェイスは効果が無かったみたいだ。

「そっかあ……………。でもそれはしょうがないよね、好きになるのに理由は要らないもんね」

そう言くと、歩は徐に私を押し倒した。

ゆっくりと、そして激しく愛し合った。歩とは、これが初めてだった。

でも、お互いが一番分かっていた。

愛の無い行為だったこと。

*

*

*

朝起きると、隣には歩が居なかった。

“もう、全て終わったんだ”

この言葉が何度も胸に突き刺さっていた。どうしようもなく不安で、何度も名前を呼んだ。

“歩、助けて……………助けて”。

私は、謙を手に入れられなくて嫉妬してた。そして憧れの恋と称して自分勝手な行為をしていたこと。

歩に申し訳なかったと思ってる、自分の罪を増やただけでなんの解決にもならなかった。

机の上には、歩の字で書かれたメモが残ってあった。

『 広乃へ。

短い間だったけど、俺は最高にヒロを好きだったよ。
お前がもし、ソイツにひどいことを言われたなら、
いつでもおいて。俺はずっと待つてるから。
いくつ年をとっても、お前を忘れないから。
さようなら、ヒロ。幸せに。

歩

『

こらえていたものが溢れた。

ありがとう、歩……。ヒロもあなたが大好きでした。

あなたが私を大人にしてくれたんだよ、いつまでも優しくった歩。
甘やかした歩。

今、全ての思い出が過去に変わった。

*

*

*

あれからは、ちゃんと学校にも登校するようになった。

きつと、歩はもう新しい彼女もできたんだろ、あんなにモテて
たんだから。

私も頑張らなくちゃいけないね。

こんなにも人に大切に想われた時期があったこと、一生忘れないよ。
私の罪は消えなくても、たとえ最愛の人に深く傷つけられても。忘
れられなくても。

明日にうつすらと、希望を持てるんだ。

こんなに、人を愛しいと思ったことはあっただろうか。

こんなに、人を欲しいと願った夜はあっただろうか。

こんなに、人を憎いと感じた日々はあっただろうか……。

今でも私は必死に生きています。

虚実が絡み合い、溶け合っているからこそ

自分の真実に近づいていきたい。

自分に素直に生きていきたい。

罪を背負いながら、私は生きるよ

たとえ、あなたを傷つけても。

（後書き）

この小説を読んで、何か感じていただけたら光栄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0628d/>

真実 まこと

2010年10月9日05時17分発行